

丸子窯

安田道雄が永年にわたり蓄積した高麗茶盃の研究成果を若手職人に指導・育成し出来上がった作品を監修したもの。

丸子窯

安田道雄

昭和24年 京都に生まれる
 昭和46年 京都府立陶工高等技術専門校専攻科 修了
 昭和63年 滋賀県大津市和邇に開窯
 以後、全国各地で個展を開催する
 「京焼の高麗茶盃」というポジションを自覚し日々精進している

※全て桐箱入



丸-2
 大井戸茶盃 細川写
 税込定価 ¥42,768 (本体 ¥39,600)

細川井戸
 大名物。天下三井戸として松平不昧公の所持品であった。元、細川三斎所持からの名。細川三斎から仙台伊達家、江戸の富豪冬木家に渡り、松平不昧公、世子月潭公に渡る。最近では不昧公百年祭・大師会茶会などに出品される。



丸-1
 大井戸茶盃 喜左衛門写
 税込定価 ¥42,768 (本体 ¥39,600)

喜左衛門井戸
 大名物。細川井戸・加賀井戸と共に天下三井戸の一つ。町人、竹田喜左衛門から本多能登守忠義に伝わり中村宗雪、松平不昧公に渡り、没後、夫人により大徳寺孤蓬庵に寄贈し現在に至る。



丸-4
 大井戸茶盃 蓬莱写
 税込定価 ¥42,768 (本体 ¥39,600)

蓬莱井戸
 名物手。現在、藤田美術館蔵。別称、「武野井戸」と称されることから武野紹鷗所持であったと推測される。箱扱家に近衛尚嗣公筆による「蓬莱」の金粉文字がある。「大正名器鑑」にも掲げられてないため伝来も判然としなかったようだが、藤田美術館において新発見された。



丸-3
 大井戸茶盃 筒井筒写
 税込定価 ¥42,768 (本体 ¥39,600)

筒井筒
 大名物。筒井順慶所持よりの名。順慶より秀吉に贈られた時、秀吉の近衆の一人が落として五つに割ってしまった。秀吉の立腹を居合わせた細川幽齋が伊勢物語の古歌にかけて「筒井筒五つにかけし井戸茶盃 咎をば我に負ひにけらしな」と詠んでその場を鎮めたとの逸話がある。永く毘沙門堂にあったが、天下三井戸と比較されずにあったが、三井戸を超えて天下随一とすべきとの評価もある。



丸-6
 小井戸茶盃 忘水写
 税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

古井戸 忘水
 忘水とは、人目につかないところを絶え間なく流れる水の事。詩花集に「住吉の浅野の小野の忘水たえ々々ならで過ふよしもがな」より名付けたとされる。
小塩通州・土屋相模守・信州上田城主 松平伊賀守
 赤星彌之助・坂本金彌・京道具商 土橋嘉兵衛
 根津嘉一郎



丸-5
 大井戸茶盃 有楽写
 税込定価 ¥42,768 (本体 ¥39,600)

有楽
 「有楽」の名は、織田信長の弟、有楽斎が愛用していたことから有楽の名が付いた。有楽斎はこれを慶長十七年(1612)の茶会に用いている。



丸-8
 小井戸茶盃 小塩写
 税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

小塩井戸
 名物の朝鮮古井戸茶盃。遠州が『続千載集』の「ふた葉より神をぞたのむ小塩山 われもあひおひの松の行くすえ」(狛秀房)の歌を引いての命名、箱書。のち、堀田相模守正亮から松平不昧公と伝わった。



丸-7
 青井戸茶盃 柴田写
 税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

柴田井戸
 重文 漢作 青井戸。織田信長より柴田勝家が拝領したことからの名。その後、青山家の臣朝比奈・大阪の数寄者千種屋こと平瀬家。明治三十一年四月、豊公三百年祭にて孤蓬庵に出品され、明治三十六年四月、平瀬家道具入札の時、藤田傳三郎が落札し現、藤田男爵家に伝えられる。



丸-11
茶盃 蕎麦写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

李朝時代中期の半茶碗で、地肌や色合いが蕎麦に似ていることから称されたとする説が妥当であり、釉景から蕎麦摺とも称された。



丸-10
茶盃 釘彫伊羅保写
税込定価 ¥35,640 (本体 ¥33,000)

李朝時代に作られた高麗茶碗の一種。鉄分の強い素地のため、表面がざらざらし、土灰釉のせいで青色や黄色に微妙に変化しているもの。釘彫りや片身髹りなどを施してあるものが多い。



丸-9
茶盃 三島写
税込定価 ¥35,640 (本体 ¥33,000)

胎土に細かな連続地紋を伸ばした土・白土を薄く掛けたもの。曆平(ヨシノ)・史(シ)・阿(ア)の三島大社発行の三島曆に似ている地紋の斑にちなんで「三島」で呼ぶことが近世以後の通説。



丸-14
茶盃 絵刷毛目写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

李朝初期に鶏籠や務安で作られた陶器。胎土が鉄を含んで黒いので、器面に白泥を刷毛塗りして下地とし、鉄砂で絵をつけ、土釉をかけて焼いたもの。



丸-13
茶盃 茂三写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

高麗茶碗の一種で、朝鮮への注文によって制作された御本茶碗の一つ。寛永16年朝鮮釜山の和船内に乗かれた対馬藩家士の御用(和館茶碗)に挿柄(はんし)として赴いた中庭茂三が、朝鮮陶工を指導して注文品焼いたと知られている。



丸-12
青井戸茶盃 平
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

釉に青みがかかっているものを指すが、釉調は「大井戸」に近いものもありさまざまである。根津美術館蔵の「柴田」などが著名である。



丸-17
茶盃 斗々屋写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

御本手に属する朝鮮茶碗の一種で、その名がらうづの魚商の元締であった納屋衆・利休や津田宗及などが所持したが、そのゆかりにつながる茶碗と考えられる。



丸-16
茶盃 黄伊羅保写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

黄伊羅保の特徴は全体黄釉に覆われ、明るくやわらかな出来栄が御茶碗として好まれている。また、土のホツレやせせり雅味多き部分も伊羅保系の魅力の一つ。香雪美術館蔵の松岡忠長氏所蔵に代表的なものがある。



丸-15
茶盃 刷毛目 合甫写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

合甫(がっふ)とは、中国の珠の名産地より玉の異名とされています。他に謡曲に「合甫」があり宝玉に関連しているが、この茶碗の白刷毛目が長珠のようだからとの一説。



丸-20
茶盃 御本 判使写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

高麗茶碗の一種。判事・判司・半州とも言われる。朝鮮の通訳官が日本へ現していた茶碗のことで、李朝期の南方朝鮮の産といわれる。その中で、御本によく似たものを御本判使という。



丸-19
茶盃 柿の蒂写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

朝鮮茶碗の一種。李朝初期に作られた。全体の形や色合いが柿の蒂に似ていることも、また高台のつくりがそれに近いからともいわれる。



丸-18
茶盃 粉引写
税込定価 ¥26,136 (本体 ¥24,200)

粉吹ともいい、李朝期の朝鮮茶碗の一種。土・釉から磨き南道産の三島刷毛目の類と考えられる。鉄分の黒い土であるため、白泥を一面に化粧掛けしているが、その白土の粒子がやや荒いため、さながら粉まぶしにしたような肌に見えるのでこの名が出た。